

## はしがき

本書は、三部から構成され、グローバル化をめぐる諸理論、具体的な政治動向、ローカルおよび一國レヴェルでの動きのフォローと、グローバル化時代における新たな民主主義的パースペクティヴを描こうと試みている。

第一部は「グローバル化と政治理論」と題し、田口富久治、松下例、渡辺俊彦の三論文を収めている。いずれも、グローバル化のなかでの権力関係の変容、新たな主体形成、民主主義やガヴァナンスのあり方を明らかにしようとしている。

巻頭の「田口論文」は、アントニオ・ネグリとマイケル・ハートらによる、「ネットワーク状の権力」という新しい主権形態としての「帝国」と世界市民による〈生〉の再所有・再構成としての「マルチチュード」に関する諸説とそれに関する議論の詳細な検討を通じて、彼らが、マルクスの経済学説の基石としての「労働価値説」が今日の「ポスト・フォーディズム」あるいは「認知資本主義」の時代において妥当性を欠いていること、〈一般的知性〉を通じた価値の実現化を見通している点を分析している。

「松下論文」は、二〇世紀における民主主義論を整理、そのヘゲモニー・モデルたる自由民主主義の限界性を明らかにし、民主主義の「民主化」・深化・制度構築の可能性を、「南」における熟議・参加型ローカルガヴァナンスや参加型予算編成(PB)の試みに焦点を当てることで再考している。

そして「渡辺論文」は、脱構築の近代論、すなわち非近代論を展開したフーコーの思想が、冷戦後のグローバル

な権力関係の登場と近代の価値が動揺する状況のなかで、いかに現状を認識し打開するうえで一定の意味を持つかを、彼の非近代論の中心論点として、構造主義、グローバル化と権力論、モダニズム等を検討することを通じて模索している。

第二部は「グローバル化と政治動向」と題し、加藤哲郎、鈴木一人、宮本太郎の三論文を収めている。

「加藤論文」は、グローバル化推進の先導役となっている「世界経済フォーラム」に対抗する形で開催されるようになった「世界社会フォーラム」の原則や哲学、フォーラムを構成する多種多様な運動体間の差異や対立点を整理し、それが、世界の格差構造を見据え、地球的連帯と民主的で現実的な代替案を求める多種多様な団体によるグローバルなネットワークをなすひとつの社会運動として歴史的・政治的意義を持つているとしながら、その成否は「差異の解放と対等の連鎖」の精神をどのように持続できるかに係っていると論じる。

「鈴木論文」は、「ポスト冷戦」時代における国際秩序の権力構造の再検討が行われるなかで、「自らが実施する様々な市場活動の規制を帝国の領域外諸国に受け入れさせる政治的勢力・共同体」と定義される「規制帝国」概念を用いて、現代のグローバル化した世界における権力構造が規制帝国間の競争的關係になっていることをアメリカとEUを中心に論じ、日本がそうなりえていない状況を、現代世界における権力が、物質的なパワーのみならず価値と理念に基づく制度的な枠組みのなかで規定されていることから説明しようと試みている。

そして「宮本論文」は、アメリカに始まるワークフェアと呼ばれる理念や政策が、国内外に伝播する過程で生み出した対抗理念や政策（就労義務優先モデルと支援サービス強化モデル）の「政策トランスファー」の検証を通じて、ワークフェアの普遍性と問題性を明らかにすることで、二一世紀における福祉政策の展望を探ろうとしている。

第三部は「グローバル化の中のローカルな政治動向」と題し、中田晋自、小澤亘、藤本博の三論文を収めている。

まず「中田論文」は、「分権・参加・アソシアシオン」の時代と言われた一九七〇年代以降のフランスで広まった「住区委員会」における「住民合議」や、二〇〇二年の法律で制度化された「住区評議会」における「近隣民主主義」の理念と制度、その運用の実際と問題点をアミアン市の例に即して検討し、「熟議Ⅱ参加デモクラシー」の制度的・実践的發展を展望するうえで、この「住区評議会」という実験に期待しうると論じている。

「小澤論文」は、「ボランテティア元年」とも言われた一九九五年の阪神淡路大震災以降、日本におけるボランテティア批判論台頭の背景に、ボランタリーセクターやその担い手の形成、それらを育てる「文化装置」が弱体であることに着目し、日韓加のボランテティア活動の実態の比較社会学的調査研究を通じて、創造的な市民育成・教育のための「文化装置」設計の基本的視点を提示しようと試みている。

そして「藤本論文」は、いわゆる「九・一一同時多発テロ」以降、「暴力の連鎖」や「戦争の政治」が続き拡大する一方で、戦争犠牲者に眼差しを向け、国境を越えたレヴェルで「和解・平和・共生」に向けた活動が展開されているとし、ヴェトナム枯れ葉剤被害者支援を通じた被害者ならびに元兵士などを担い手とする市民レヴェルの国際連帯運動を例に分析し、こうした回路の取り組みの世界的な広がり期待する内容となっている。

以上のように、本書の執筆者は、専門領域や研究対象、研究の視点や分析の視座を異にしているものの、政治学を中心として、「グローバル化の時代」と言われる今日の世界政治の状況を的確に認識し、グローバル化の中での権力関係の変容、新たな主体や理論形成、ローカル、ナショナル、リージョナル、グローバルなレヴェルでの民主主義やガヴァナンス、協働と連帯のあり方を明らかにしようとしている点では認識を共有している。その意味で本書は、グローバル化時代の政治学に課せられた課題を明らかにし、その論点を明確にするとともに、グローバル化

時代における新たな民主主義的パースペクティヴを描こうとする点で、問題提起の書でもある。

二〇〇八年二月

編者を代表して

國廣 敏文